

人工内耳装用児の皮肉理解と感情判断に関する一考察

視覚提示と聴覚提示による差の検討

○笹目友香

小淵千絵

城間将江

（国際医療福祉大学 成田保健医療学部 言語聴覚学科） （国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科）

KEY WORDS: 言語の意味情報、感情情報、皮肉

（目的）

聴覚障害児は、語彙や文法の獲得だけでなく、言語の運用にも課題を抱えるとされる。私たちが日常的に交わすコミュニケーションでは、話者が発した言語的な意味とその人が伝達する感情が異なる場合が少なくないが、聴覚障害児は、このような会話での発話者の意図を汲み取ることが難しいとされる（野原，2018）。言語情報と感情情報に不一致が生じるものに皮肉や冗談があげられる。比喩・皮肉文テストを聴覚障害児に行った先行研究で、皮肉文は、聴児の4年生の成績と聴覚障害児の5、6年生の成績が同等であったと報告されている（本田，2013）。皮肉を理解する前提として、発話の言語情報を字義通りに捉えず、話者から発せられる、表情、声色などの非言語的な情報を受け取る能力が必要となる。聴覚障害児が、言語情報と非言語情報をどのように処理するのか、視覚処理と聴覚処理で比較した研究は少ない。そこで本研究では、聴覚障害児の言語情報と感情情報の不一致に対する感情判断について、比喩・皮肉文テストへの応答成績を含めて検討する。

（方法）

対象: 難聴学級に在籍する人工内耳装用(CI)児(10歳)1名
基本情報: 平均聴力レベル右 108dBHL、左 109dBHL、片耳 CI 装用下最高語音明瞭度 86%、WISC-IVでは全検査IQ83、言語理解指標 72、知覚推理指標 109、ワーキングメモリー指標 82、処理速度指標 96、PVT-Rでは評価点4であり、言語発達の遅れがあるが、認知発達は年齢相応であった。対象児及び保護者に研究の目的について説明し、同意が得られた上で実施した。

課題: 提示された言語情報と感情情報の一致/不一致の判断を求めた。文字と表情の一致/不一致を求める課題（視覚課題）と、音声とプロソディの一致/不一致を求める課題（聴覚課題）の2課題実施した（表1）。

刺激: 言語がもつ意味情報として肯定的な語（例：いいね）/否定的な語（例：きらい）の2種とし各5語、計10語を使用した。それぞれの語について、言語情報と感情情報の一致/不一致条件を設定した。刺激提示は、一致条件40刺激、不一致条件10刺激とした。両課題とも刺激はパソコンよりランダムに提示し、ボタン押しにより反応を求めた。音声刺激は、CI装用下でMCL(快適レベル)にて、スピーカーより提示した。

手続き: 視覚課題では表情と言葉の内容が一致していれば○、そうでない場合は×を、聴覚課題では声の韻律と言葉の内容が一致していれば○、そうでない場合は×を押すよう説明を行った。その後練習課題を行い、教示が理解できていることを確認し、本課題を行った。

また、別途比喩・皮肉文テストを文字提示にて実施した。

分析方法: 両課題における一致条件と不一致条件の正答率および反応時間を算出し、かつPVT-R検査結果、比喩・皮肉文テストの結果との関連について検討した。

表1 課題の刺激提示方法

	言語情報	感情情報
視覚課題	文字	表情
聴覚課題	音声	プロソディ

*視覚課題の「文字」は平仮名提示、「表情」は女の子が笑っている/怒っている表情のイラストを使用した

（結果）

視覚課題: 一致条件の正答率は100%、平均反応時間は1.81秒であった。不一致条件の正答率は100%、平均反応時間は2.94秒であった。

聴覚課題: 一致条件の正答率は63%、平均反応時間は2.14秒、不一致条件の正答率は20%、平均反応時間は2.45秒であった。

比喩・皮肉文テスト: 比喩得点3/5点、皮肉得点2/5点、回避得点（皮肉を問う問題で、字義通りの解釈を回避した得点）4/5点であった。

（考察）

本児は、視覚課題では一致/不一致条件ともに100%の正答率を示しており、視覚情報を手掛かりとして言語情報と感情情報の基本的な一致/不一致の判断が可能であることが明らかとなった。反応時間は、不一致条件は一致条件に比べて1.13秒延長した。一般的に私たちのコミュニケーションでは表情と感情は一致していることが多いため、一致条件は判断が容易であり、不一致条件のように矛盾した情報に判断を下すまでには時間を要すると推測される。聴覚課題では、一致/不一致条件とも視覚課題に比べて正答率が低下した。小淵（2015）は、CI装用者が韻律情報の知覚に困難を示すことを報告しており、本児についても、聴覚情報から感情情報を取得することは困難であったと推察される。すなわちCI装用児では、視覚的に言語情報と感情情報の不一致は理解できるにもかかわらず、聴覚情報ではその不一致を理解することは難しく、聴覚的な皮肉については気づきにくいと考えられた。

本課題の結果と比喩・皮肉文の関連について、本児の皮肉得点は比喩得点に比べて低いものの、回避得点は4/5点であり、皮肉を字義通りに受け取る誤りは少なかった。誤答を示した皮肉問題の選択肢には「荒れはてている」「みずばらしい」などが含まれており、本児の語彙力に照らし合わせると、これらの語彙が理解できず、正答を選択しなかった可能性もあり、皮肉理解とあわせて言語指導の促進が必要であった。

今後は、症例数を増やし、聴力や補聴条件などを統制し、聴覚障害児の他者の感情判断についてより詳細に検討していくことが重要である。また、本児のように、語彙力が乏しい児の皮肉や他者の感情理解の評価を行うに適した方法を考案することも必要と考える。

（文献）

野原信・廣田栄子（2018）聴覚障害児における会話時の意図理解に関する検討: 社会的知識の使用. *Audiology Japan*, 61, 538-545

本田夕真（2013）聴覚障害児の比喩・皮肉理解能力. *Journal of Osaka Kawasaki Rehabilitation University*, 7, 157-169
小淵千絵・大金さや香・加我君孝（2015）聴覚障害者の感情音知覚に関する検討. *Audiology Japan*, 58, 569-570

(SASAME Yuka, OBUCHI Chie, SHIROMA Masae)